

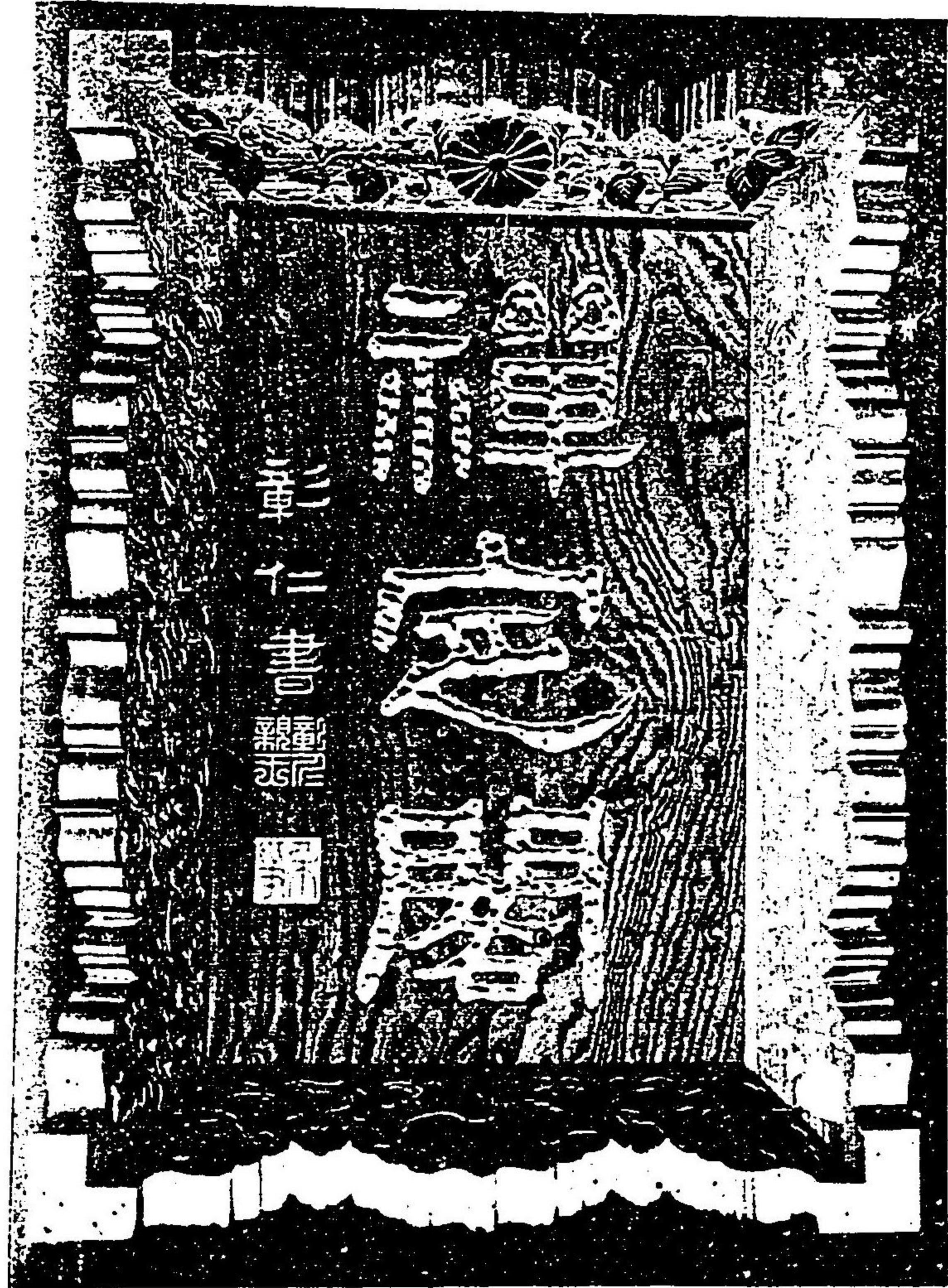
再建
紀念
豐蔴物器成良

269
542



野初生涯出好狂
 秃锥鋤斧漫商量
 有人若問個中事
 笑指屋頭鬼面在





小松宮殿下御染筆惠林寺山門之額

右再建復唯

昭治四年初夏

信正沙門元尊





開山夢窓國師竹屋像

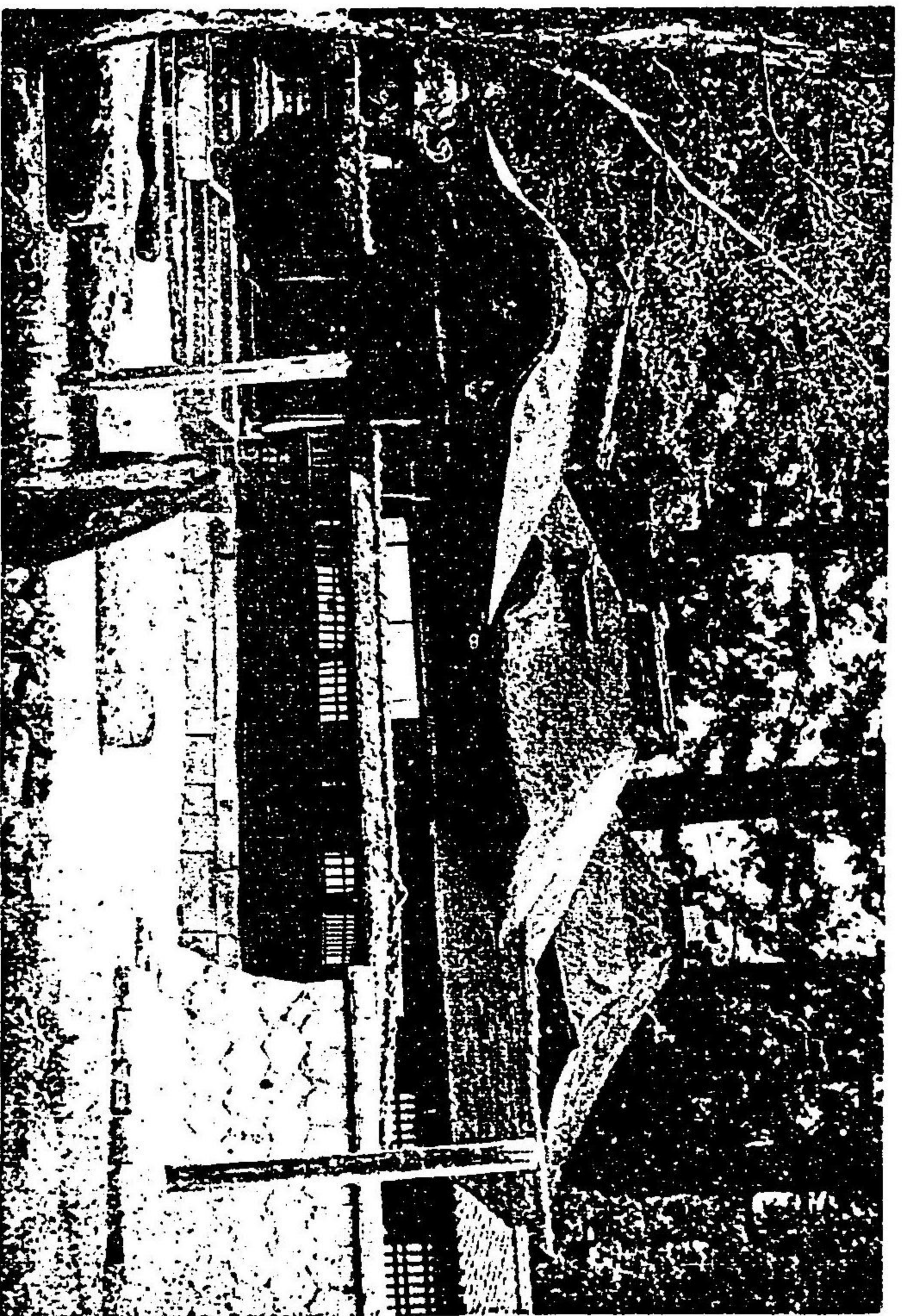


脫破布納普金縫衣
 呼為獅子皮大錯
 啖作烈赫極全非
 惠林祥風々毛外
 萬里天邊一鷄飛
 為絕一鷄書以為正傳
 天正癸集戊寅八月日
 再往幸園現住惠林
 快川老朽
 右之甘唐誠ニテ不能見故
 寫之別之附ス

快川國師自贊之像



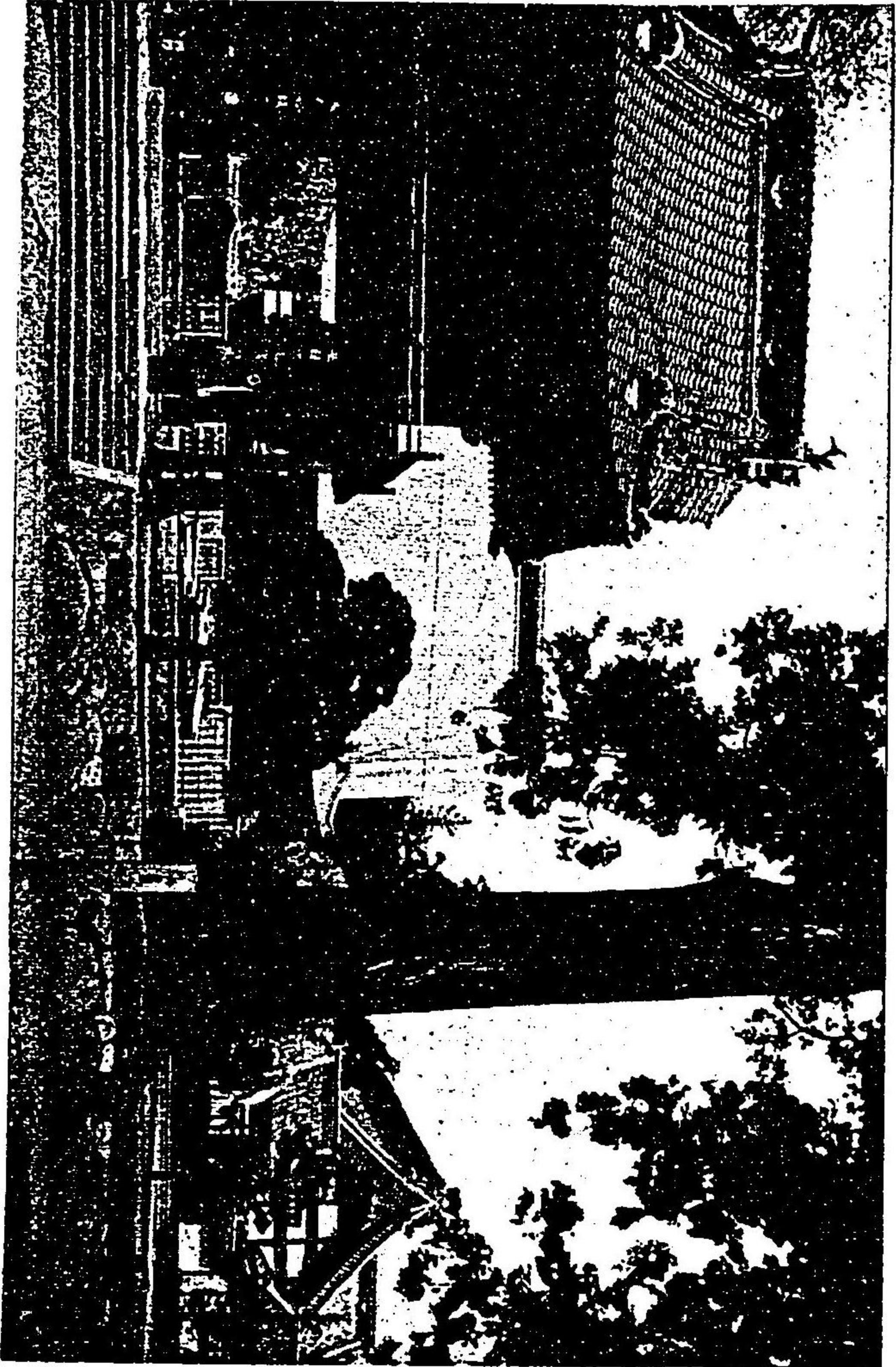
武田機山公之竹像



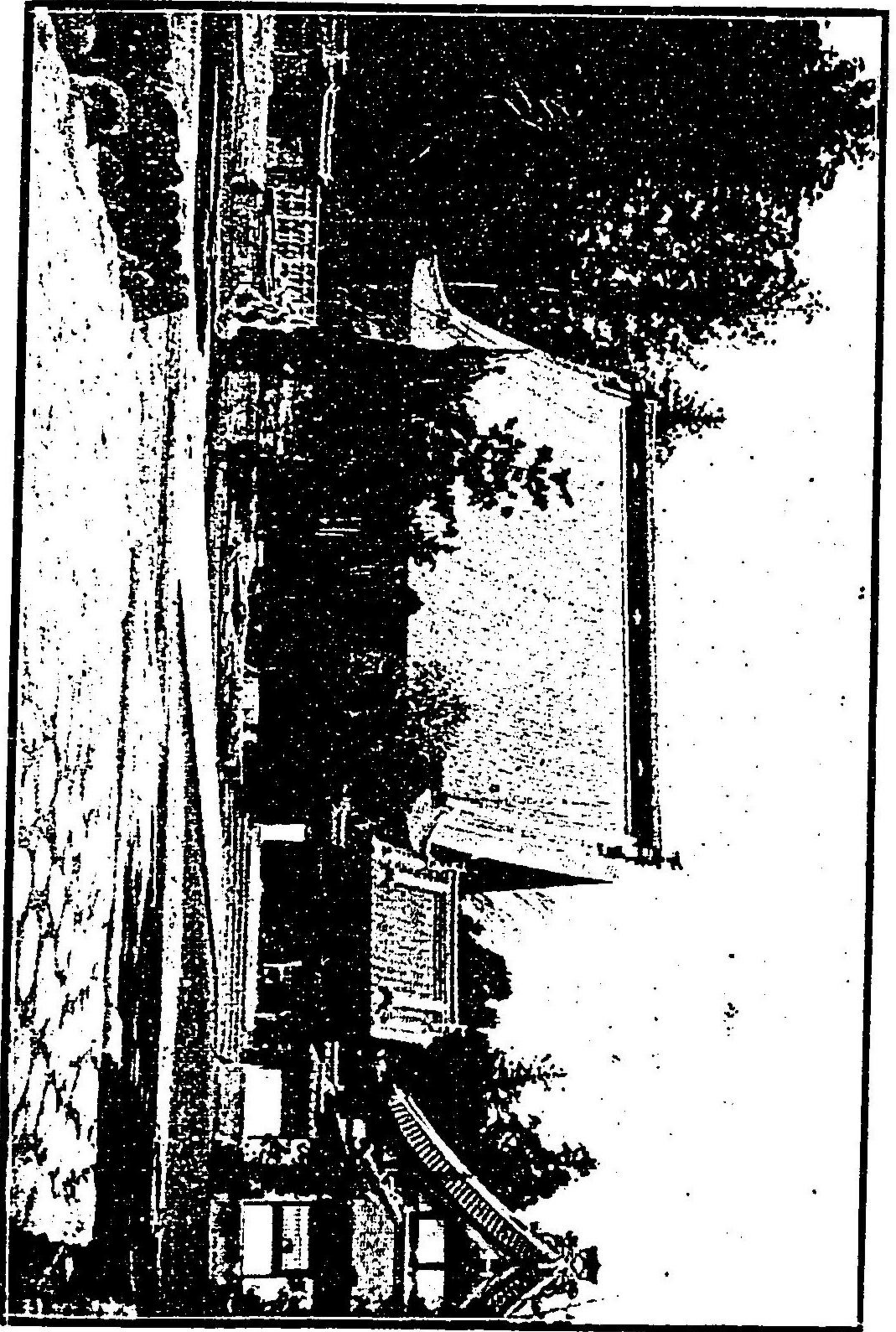
武信山支靈正殿之圖



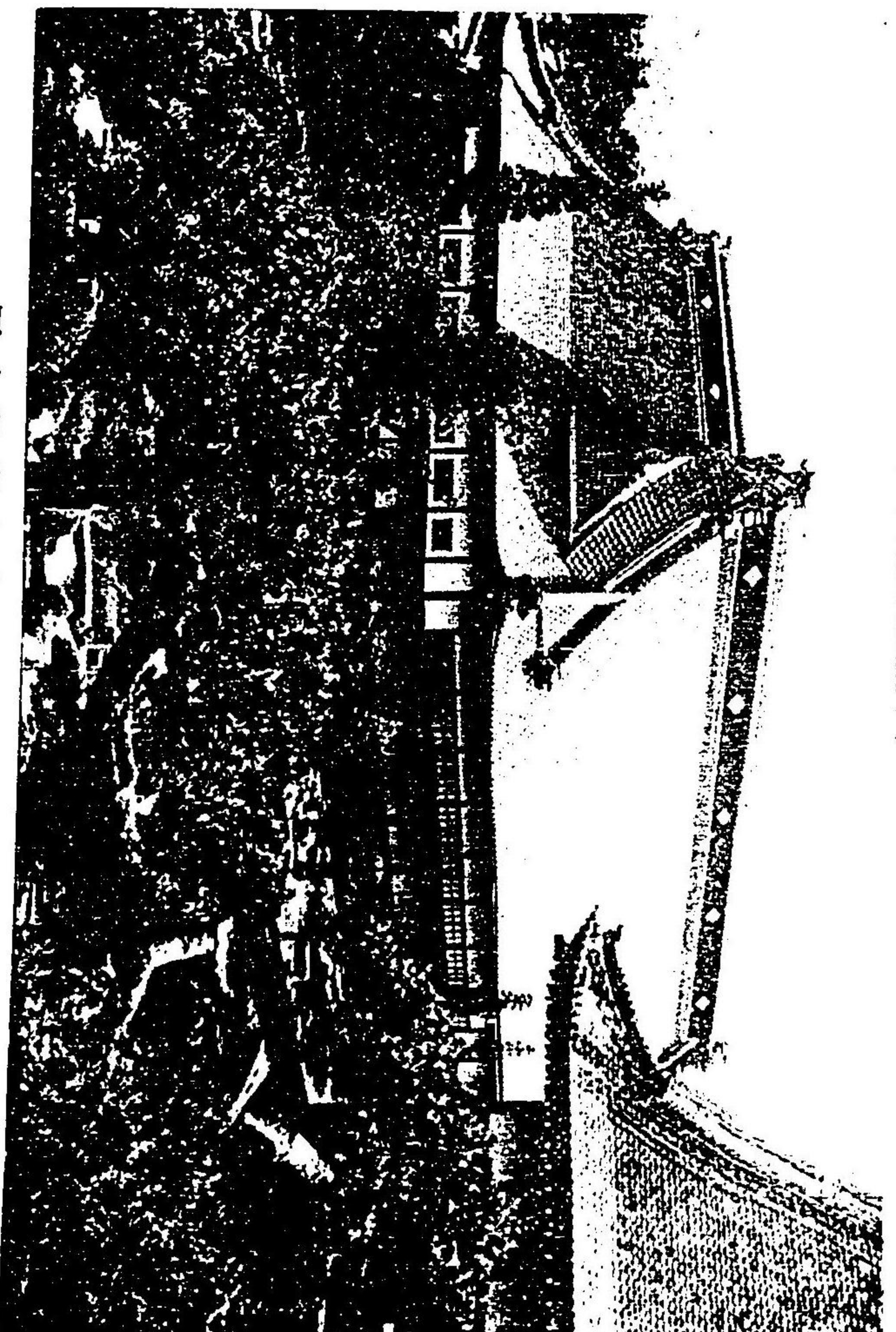
甲 斐 惠 林 寺 赤 門 之 景



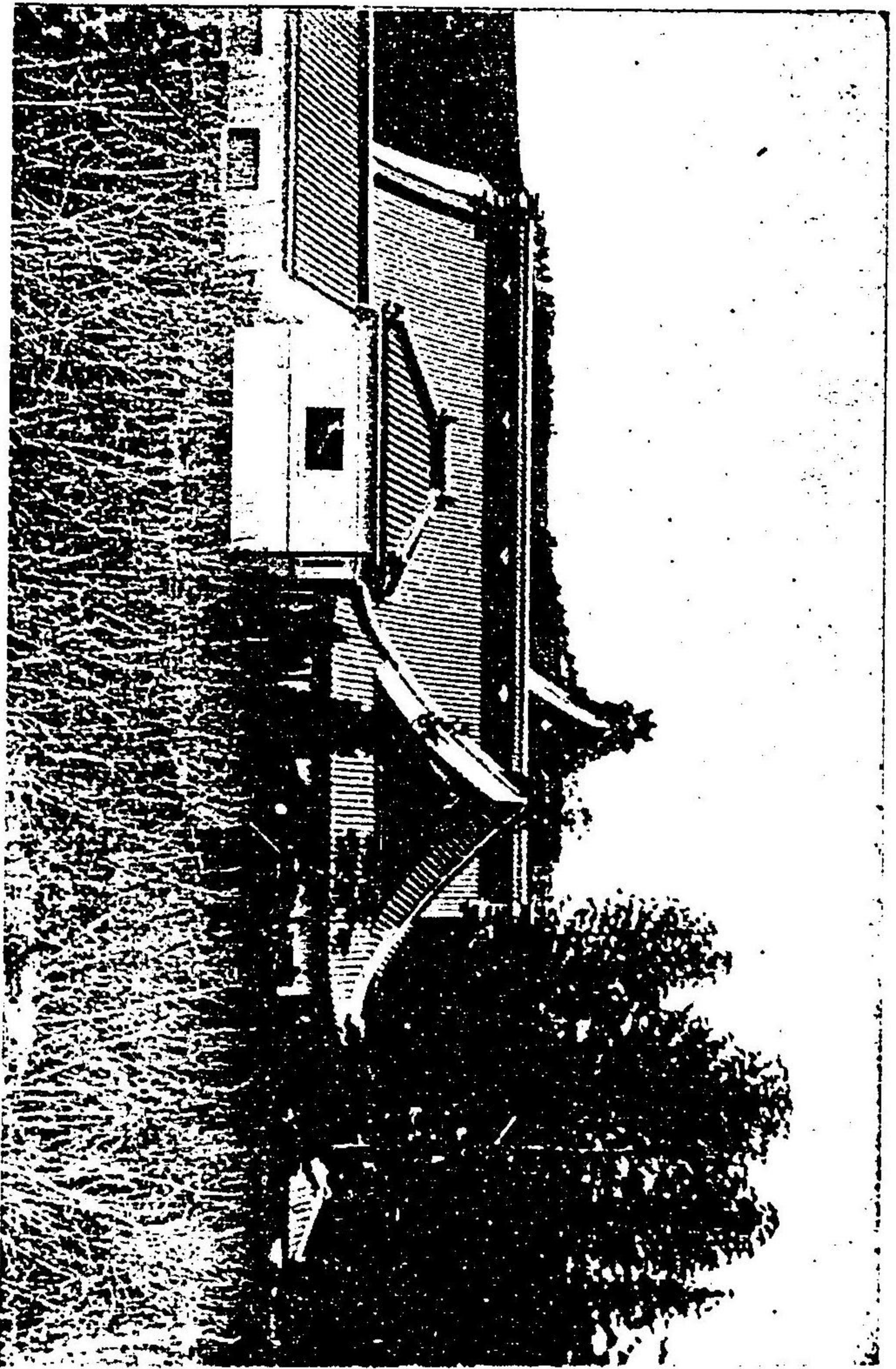
山門前ヨリ見ル慈林寺之景



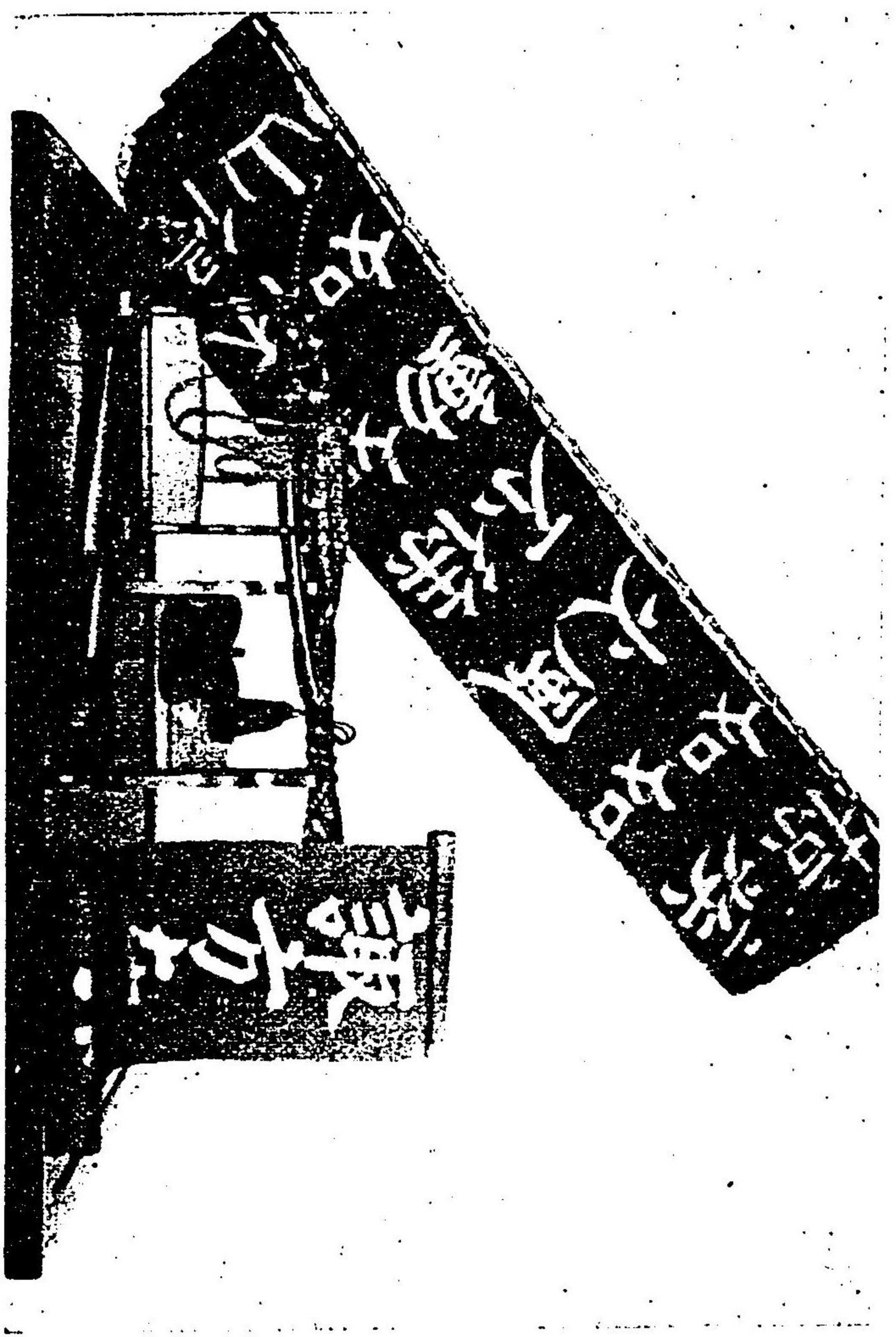
圖ルヲ見リヨ面正ヲ裡庫及堂本建再寺林慈



圖之裡庫丈方ルタ見リヨ園庭面北



東方面ヨリ見ル慈林寺之景



扇團配軍旗軍及刀佩御物遺公山機寺林惠斐甲

眞林寺の庭園



乾徳山惠林寺略史序

乾徳山惠林寺は七朝帝師が此の地の秀靈山水の明媚を愛し入道々蘊の懇請に應じて開創し中口蓋世之英雄機山公は信仰の中心地とあし偉望朝野に高き快川國師は來りて大法幢を樹つ天正十年織田右府の殘虐に對し光前絶後和漢獨歩之烈操を顯示して千載に照耀す堅忍不拔の木挽翁は奮然萬死に一生を保ち徳川霸府の智遇を擔ひ惠林の枯根春風に芽を發す元祿の太平に丁り今太閤の稱ある柳澤彌太郎之に培ひて愈々繁茂し陸離たる光彩を放つ歲月悠々六百年峽中第一の名刹大藍ありしも明治卅八年初春再び丙丁童子の醜弄を受けて烏有の焦土とある名匠高德垂化の靈境英雄剛傑崇拜の聖地殆ど絶へんとす豈運た大徳の出るあからん哉護法の諸天劫を降して他の力量底を試商する乎笛川老漢苦辛經營孜孜不屈再建已に成り輪奐之光却て舊觀を凌駕す嗚呼昔日天岸和尚言へることあり曰く惠林名甲去來今と讖言如今に及て空からざる也

今次再建紀念として略寺史編纂の事を山岡氏と約す期已に迫り將に筆を執らんを欲し轉た恐怖の感に打たる其れ此の小冊子の經たり緯たるものは何ぞや法界の偉人與絶世の英傑たればあり其の教化其の信仰の跡を逐ふて始めて惠林寺史は成るもの也淺學無識分の敢て能くすべき所にあらず然も強て稿を草す杜撰は元より其の所あり希くは仁賢教を垂れて誤を訂されんことを

明治四十五年初夏杜鵑啼血細雨蕭々夕

於惠林賢姜寮窓下

編

者

誌

惠林寺之略史

抑も當山は臨濟宗妙心寺派に屬し別格中本寺たり末寺三十餘ヶ寺塔中四庵を有す東山
梨郡松里村の内藤木小屋敷三日市之三村に跨り寺域三萬六千四百坪維新前は寺領五十
九石五斗餘山林方壹里の朱印地を有せり

開基は二階堂出羽守藤原貞藤也貞藤は此地之領主として平常佛法を尊信せり偶々稀世
之大徳夢窓國師に禮謁するや歸依益々深厚にして遂に邸宅を革めて禪院となし國師を
屈請して開山第一祖となす惠林寺即ち之なり國師始め徳和之乾徳山に入り一夏面壁せ
しことあり因つて乾徳を以て山號とす佛乘禪師之東歸集に偈あり

賀シ惠林新寺ヲ呈ス夢窓和尚ニ

天岸

揮レ戈佛日回ニ三舎ニ 大用現前雷發レ音 挿草識如ニ契符合ニ 布金設幻ニ寶坊森ニ 展ニ降
龍盃二搏ニ香積ニ 開ニ選佛場ニ 投ニ芥針ニ 啓廻人天無ニ第二ニ 惠林名甲ニ去來今ニ

天岸相訪於甲之惠林一有偈次韻爲謝 夢窓

二

凌空金錫在降臨 數日清談味德音 鑿彩殿堂成壯麗 著幽林樹轉陰森 淡交
喜得懷無磔 浮世從他豈有針 盛事定應傳永劫 山門不翅幸于今

甲州惠林適值祖忌一作偈呈夢窓和尚 天岸

破了六宗摧異見 放開五葉一花春 祖翁隻履今何處 借問當時得髓人

爾後濟門之諸老宿輪次に住持す多是夢窓の法子にして鎌倉五山派なりき二世滿翁三世
曇翁瞿四世無元五世省哲六世端照三人住持せしことあり

送三元首座住惠林 夢窓

天官夢裡不停機 出格風流惟自知 古錫淒空霜露冷 惠林菓熟在斯時

送哲首座住甲之惠林 全

世迨澆漓歲月深 祖門日廢莫由禁 良哉宗匠樂懷乎 鋤斧高提入惠林

送昭首座住甲之惠林

化門隆替有因緣 一髮千片要保全 法雨母慳澍邊鄙 惠林榮茂蔭人天

七世古先印八世明叟齊哲と云ひし二人業海等之六人と同じく元に入り天目山の中峰に
參下たることは高僧傳に明かなり青山慈永龍湫周澤絕海中津通容宏感曇芳周應等
相續いで住せり此等は皆國師の嗣法也國師名は疎石木訥叟と號す初號は智曜と云ふ

建武二年後醍醐天皇特賜夢窓國師號貞和二年光明天皇特賜正覺國師號觀應二年光嚴天
皇特賜心宗國師號延文三年後光嚴天皇特賜普濟國師號應安五年後圓融天皇特賜玄猷國
師寶德二年後花園天皇敕諭佛統國師號文明元年後土御門天皇敕諭大圓國師號

建治元年伊勢に生る師は勢州之源氏宇多天皇九世の孫母は平氏男子を生んことを願ひ
嘗て觀音に禱る一夕金色の光一道西より來り口に入ると夢む覺て身むこと有り十三月
を経て始めて誕す而て母惱む所なし弘安元年師四歳の時母黨事あり父家を擧つて逃れて

甲斐に入る師資性温粹常に佛像を尊敬し口能く梵經を誦す九歳にして八代郡市川郷平
鹽山空阿大德の所に詣りて出家し釋典孔孟老莊之書を學ぶ才能衆人に過ぐ一夜夢に唐

三

土の踈山石頭の二刹に遊び一長老あり一頓子を取つて與ふ展べて之を視れば連磨半身の相也師卷て之を懐にす夢乃ち覺む是に由て自ら縁の禪宗に契ふことを知り依て煉石を名とし夢窓と號す茲に於て衣を替へ鎌倉建長寺に至り寧一山に侍し京都に抵り建仁寺無隱の室に入り奥州に遊び佛國の堂奥を盡して甲斐に歸り常牧山に安居して或る夏の夕庭前樹下に涼を納れて打坐覺へず夜は深け困を帶ふ庵に入り當に牀に上らんとし牆壁むらさ處を有と思ひ身を靠せんを欲し誤つて喫顛するや忽然として悟入する處あり失笑乃ち頰を作る

多年堀地覓青天一添得重々礙膺物一夜暗中颺二碌輒一 等閑擊碎虚空骨
爾來佛祖之機間を觀透す又頰を作り曰く

西秦東魯 信不ニ相進一 蛇吞ニ龍鼻一 虎咬ニ大蟲一

後醍醐天皇元徳二年惠林寺を創して茲に住し後京都に登り天龍寺に在り上は皇帝將軍より在廷の百官縑素の別なく接化度生し法壽七十六歳にして入寂せらる吾甲斐國に開

基所八ヶ寺あり國師の詳傳は夢窓錄延寶傳燈錄本朝僧寶傳等に明也

國師より三十一世天桂玄長禪師之時國守武田信虎の歸依を得永録七年には太守武田晴信公惠林寺領として三千石を寄附し惠林寺を以て壽藏所と定め遂に古規を改め妙心寺派に隸し濃州崇福寺より快川紹喜禪師を拜請して住持とす快川和尚は妙心寺に出世し法を仁岫宗壽に嗣き夙に偉望あり高風盛徳天聽に達す正親町天皇勅賜大通智勝國師號故に武田晴信公之國師を尊崇禮遇すること甚だ腆し殊に師の鉗鎚を受けて益々禪法を崇しより名匠之來り集る者多く快川春國常に立て師家とある甲陽軍鑑に或る時八卦の不動本尊なりとて惠林寺の奥上求寺の不動へ御參り候二月未にてころ有つらめ大通智勝國師より使僧を立て兩袖の櫻やうくにて候花の本に一所かまゑて待奉る御立寄候へとなり信玄公聞し召し花と承るに參らぬは野なりとて立寄らせ給ふ云々此の時一首の詠歌あり

誘はすはくやしからまじ櫻はな

さねこん頃は雪のふる寺

快川國師是に和したる絶句あり

太守愛櫻蘇玉堂。惠林亦是鶴林寺

元龜四年信立公薨去するや快川國師導師たり法諭は惠林寺殿機山信玄大居士但し一説に秀之所名也天正十年右大臣信長大舉府中に躰入し武田家を天目山に亡し暴威を逞ふす自是先江州の浪客佐々木承貞或は云ふ一子及び室町家の士大和淡路守上福院等嘗て寄食し本州に在り織田右府素より佐々木を惡み頻に之を捕へんと欲す三人皆走りて惠林寺に匿る人あり之を右府の營に告ぐ茲に於て信長兵士を遣わし搜索せしむるに彼は已に轉じて北國に逃るを以て捕ふる不能織田の士津田長谷川關赤座等寺境に迫り亂暴狼藉至らざるなく門を鎖さして寺衆を出さず信長更に命を兵士に傳へ衆侶を驅りて山門樓上に上らしむ快川國師并に大綱陸庵高山長禪寺住持藍田東光寺住持以上紫衣の東堂五人皆信玄公所府中避亂也黒衣の長老九人僧侶喝食凡る壹百人に達す士卒薪を運んで門下に堆積して之に

火を放ち刀槍を林立して山門の四面を圍む猛火焰々天を焦す國師始め一山の清衆悉く燒殺され堂塔伽藍什寶什器殘す所なく地を拂つて烏有とある此時快川國師は衆侶と與に山門樓上に威儀を整へ位に據りて結跏趺坐せらる猛火已に門を包み火光衣袖に點する時泰然として大獅子吼衆に對して曰く正當與廢之時節人々如何大法輪を轉じて去らん各々一轉語を着して末後の句と爲よ衆下語す師即唱て曰く

安禪不三必須三山水一滅却心頭一火自涼

と自若不動端然として化し了る實に天正十年四月三日也

明治十四年國師の三百年回到當り大遠諱を修し時に三條太政大臣貫美公篆文を書し鎌倉圓覺寺大教正洪川禪師撰文露々居士大内青巒氏の揮毫を以て碑を山門之前に建つ其碑文に曰く

惠林寺中興特賜大通智勝國師快川大和尚火定碑銘并序

余歷三覽和漢古今僧史一末後坐三斷火刀堆一整三威儀一舉三法令然與衆人三火光三昧三

百年來留_ニ無數英雄之淚痕_ヲ者、吾快川國師一人耳。師諱紹喜字、快川濃州、人族土岐氏承_リ法_ヲ仁岫宗壽禪師、風神瑰瑤智宿曠淵出_ニ世_ス妙心_ニ初_メ住_ス本州崇福寺、府主齋藤義龍昏闇不_レ敬_レ師_ヲ拂_テ衣如_シ甲_ニ太守源晴信嘗慕_ニ高風_ヲ迎請住_シ惠林寺、禮遇甚_ク、腆衆盈_ニ二千指_ニ天正九年正親町天皇聞_キ其偉望_ヲ特_ニ賜_フ大通智勝國師之號_ヲ舉國靡_レ風化_セ。天正壬午春平信長父子與_ニ府主源勝賴_一有_リ隙大舉陷_ル州城、全家潰滅_ス府內禪衲避_シ惠林寺、信長頻召_レ師師固辭不_レ出、偶江州太守佐佐木義弼作_ニ敗軍_ノ將_ト籍_ニ脫_レ在_リ寺師匿_レ之不出、轉逃_ニ北國_ニ於_レ是信長大_ニ怒_リ遣_シ武夫數百人驅_テ山中僧衆_ヲ趕上_{ラシ}山門_ニ々々下積_レ薪四面、放火士卒持_テ戟環列_シ露_及林立_ス法泉寺雪峰存東光寺藍田青長禪寺高山壽等及學徒壹百餘人皆整_ヘ威儀_ヲ依_テ位_ニ在_リ塔焰煙中_一坐_ス國師據坐垂語日諸人即今向_ニ火焰裡_一如何轉_ニ大法輪_ヲ去_ル各着_テ一轉語_ヲ爲_ニ末後句_ト衆皆下語_ス師即唱_ヘ曰安禪_ハ不_ニ必須_ニ山水_ヲ滅_ニ却_ニ心頭_ニ火_モ自_ラ涼_シ既_{ヨシ}猛火着_ク衣_レ恬然不_レ動_レ與_レ衆人_ニ火定_ニ而化_ス實天正十年四月三日也、嗚呼護法諸天之爲_レ法試_ニ聖勇_ヲ者命難_ニ令_レ顯_ニ烈操_ヲ也亦嚴矣哉抑師子之於_ニ劇寶_ニ無職

之於_ニ沮渠_ニ國師之於_ニ信長_ニ皆類也出乎其類也_ニ而拔_シ其萃_ヲ者國師也論者或_ハ謂_フ平氏橫_ニ害_シ國師_ヲ僅_ニ踰_ニ兩月_ヲ躬遭_ニ家臣之篡逆_一而死_シ焚蕩_シ其屍_ヲ亡_ニ滅_シ其家_ヲ遺_ニ惡名_ヲ後代_ニ雖_モ夢幻塵世_ト業感其_レ舍_レ諸余意_ヲ是_レ唯以_レ業感論_{スル}ハ則_チ是以_レ國師論_{スル}ハ則_チ不是看_ヨ如_ニ國師及一百餘員禪衲_ノ通_ニ達_シ宿業_ニ甘_メ受_シ命難_ヲ苟_モ不_レ以_テ平氏_ヲ爲_シ懷故_ニ在_ニ猛火裡_ニ欽_テ戴_ニ國師法令_ヲ恬_シ而_レ不_レ動井井整_ヘ威儀_ヲ而入_ニ火定_一豈_ニ如_ニ常人_ノ圖_ハ償債_上甘使_ニ渠受_レ報如_レ此者比乎哉况_ヤ於_ニ佛天試_ニ勇_ヲ令_レ顯_ニ其烈操_ヲ哉是_レ唯平氏_ノ亡滅_{スル}ハ渠_ガ熾惡之心累積_メ自足_ニ以招_レ之而已非_レ關_ニ國師事_一也今茲明治十四年四月三日恭值_ニ國師三百遠年之正忌_ニ山主笛川長老及檀信衆等修_ニ追悼勝會_一之次欲_レ刻_ニ國師逸事_ヲ于堅砢_一以_テ傳_中不朽_上徵_ニ銘_ヲ于余_ニ往昔唐象骨老師有_レ言_ハ曰_ク三世_ノ諸佛向_テ火焰裏_ニ轉_ニ大法輪_ヲ想_フ當_ニ向_ニ千載_下扶桑國裡_ニ爲_ニ國師及衲子_ノ道_シ謹_爲銘_曰

乾德名山 雜華靈趾 希有佛天 化_ニ降開士_一
大通智勝 光_ニ闡宗美_一 忽_チ現_ニ奇化_ヲ 火刀堆裡

一百神足 炳々燐々 國師據坐 轉大法輪

琅琅獅吼 涼颯絕塵 猛火着衣 恬然不動

一毫命輕 九鼎法重 平氏凶暴 曷敢聖勇

民庶歸仰 三百星霜 堅砥新聳 卓跡匠藏

國師來哉 瀑鳴花香 不覺翻身 握筆管打

謹提大綱 寫師真景 落落無縫 永鎮靈境

明治十四龍舎辛巳四月

圓覺興聖禪寺權大教正洪川宗温謹撰

太政大臣從一位勳一等三條實美篆額

露々居士大内青巖敬書

天正十三年德川家康人國のことあるや惠林寺有縁の者を徴されしに敢て答ふる者なし
末宗瑞喝禪師は快川國師授法の人也始め衆僧と同じく山門上に侍せしが忽ち大火聚の

内を躍出し禍を逃れて乃ち民間に潜む是に於て出て謁す因つて家康寺領を寄附し寺門
之再興を勤む故に末宗和尚大に感奮し一身を土木に委し年を歴て成工頗る舊制に效へ
り

相傳ふ快川國師火定するとき徒弟二人を召し囑諭するに續法の大事を以てす二僧命を
啣み山門上の兩扉を撤し之れに跨り火中を脱る二扉共に今尙存す花に獸の形を彫り古
雅最も愛すべし禪師は其の中の一僧なり

禪師中興の業を起すや夙夜不懈一生の精力を土木三昧に傾け木挽翁の名を得るに到り
惠林の枯根再び一葉を生ト信玄公一十年忌に當りては嚴有院殿徳川四代將軍封疆三
十石を増賜せられ齊會を修するや武田貴冑の幕下遠孫に告げ大に資を募り殿堂門廡に
一大修飾を加へ轉た美觀を増すに到れり寶永二年又玄公百三十三回の辰に當りし時

柳澤美濃守吉保本州に封せらるゝ哉武田家の舊に效ひ奥都城とせられ歸依又厚く寺門
に潤色を施したれば莊嚴の美輪奐の大敢て峽中に冠絶するのみならず天下に誇るに足

なり柳澤吉保登山奉拜の時、前年の秋、彼より、（以下略）

百多あり、二十三年の夢の中、（以下略）

一、（以下略）

田下部鳴鶴大人或る年の冬の初来りて遊ぶ時に詩を賦て曰く、（以下略）

樹老泉清心自閑、（以下略）

英雄埋骨高僧寺、（以下略）

明治維新の際一般寺領は上地となり寺門の保續經營漸く困難に陥り寺職又其の人を不

得寺規全く壊亂し、さしもの名利大伽藍も殆ど荒蕪に委せられ雨漏り風透り荒家たる古

梵宮見るも無残に又憫なりしが十六世圓應和尚斯の秋住山せられ専心寺規を恢張し力

を堂宇の修繕維持に盡され稍や面目を改むるや現董圓山笛川禪師を迎へて職を譲る自

是笛川禪師は只管寺門之經營修飾に意を傾け力を注ぎて是れ日も不足慨の如き傳い

明治十三年

鳳葦當國に御巡幸あり敕使を當山に派せられ精しく開山以來の歴史と武田家との關係

寺門の現況を調査し後宮内省を経て保存資金として金三百圓を下賜せらる之に因つて

檀信徒の歸依一段厚を加へ明治廿七年には小松元帥宮彰仁親王殿下勝景臺覽の爲め親

臨あり寺境所々風致を撮影し殊に快川國師の爲に禪定閣の御染筆を賜ふ於茲乎惠林寺

の名は更に江湖の人口に膾炙され貴顯縉紳外賓之登山漸く繁く笛川禪師の苦辛は寺門

の經營に現われ益々其の歩を進め將に完美に近からんとする明治三十八年二月十一日

再び回祿の慘禍を速き僅に開山塔并に機山公靈殿と他數棟を残し餘は擧げて灰燼に歸

したり然れども機山公の英靈は赫々として百世を照らし開山中興兩國師の遺芳は千載

に芬々として香りて炳乎たる歴史は此の名震勝區の廢絶を恕るさず同年九月再建の計

劃は成れり笛川禪師は身命財を抛つて省みず爾來着々工事を進め今哉舊觀を凌駕すべ

き堂塔伽藍は靈を連ねて蒼空に聳ゆるを見る本堂上棟式に當り笛川和尚銘を爲りて曰

れり柳澤吉保登山参拜の時一首の詠歌あり

百あまり三十三年の夢の中

かひありてけふとふそ嬉しき

日下部鳴鶴大人或る年の冬の初來りて遊ぶ時に詩を賦て曰く

樹老泉清心自閑 白雲滿地隔三蓬寰

英雄埋骨高僧寺 雙絕千秋乾徳山

明治維新の際一般寺領は上地となり寺門の保續經營漸く困難に陥り寺職又其の人を得寺規全く壞亂しさしもの名利大伽藍も殆ど荒蕪に委せられ雨漏り風透り荒寥たる古梵宮見るも無殘に又憫なりしが十六世圓應和尚斯の秋住山せられ専心寺規を恢張し力を堂宇の修繕維持に盡され稍や面目を改むるや現董圓山笛川禪師を迎へて職を譲る自是笛川禪師は只管寺門之經營修飾に意を傾け力を注ぎて是れ日も不足慨ありき偶々

明治十三年

鳳麓當國に御巡幸あり敕使を當山に派せられ精しく開山以來の歴史と武田家との關係寺門の現況を調査し後宮内省を経て保存資金として金三百圓を下賜せらる之に因つて檀信徒の歸依一段厚を加へ明治廿七年には小松元帥宮彰仁親王殿下勝景臺覽の爲め親臨あり寺境所々風致を撮影し殊に快川國師の爲に禪定閣の御染筆を賜ふ於茲乎惠林寺の名は更に江湖の人口に膾炙され貴顯縉紳外賓之登山漸く繁く笛川禪師の苦辛は寺門の經營に現われ益々其の歩を進め將に完美に近からんとする明治三十八年二月十一日再び回祿の慘禍を速き僅に開山塔并に機山公靈殿と他數棟を殘し餘は擧げて灰燼に歸したり然れども機山公の英靈は赫々として百世を照らし開山中興兩國師の遺芳は千載に芬々として香りて炳乎たる歴史は此の名震勝區の廢絶を恕るさず同年九月再建の計劃は成れり笛川禪師は身命財を抛つて省みず爾來着々工事を進め今哉舊觀を凌駕すべき堂塔伽藍は蔓を連ねて蒼空に聳ゆるを見る本堂上棟式に當り笛川和尚銘を爲りて曰く

乾德名山	惠林禪刹	正覺道場	快川法窟	明治卅八	二月十一
祝融爲祟	堂宇灰燼	爾來閱歲	僅伍六霜	檀信歸崇	子來助役
經營慘憺	厨庫先成	今也本堂	正告竣工	巍々寶殿	碧雲搖曳
劫後光輝	衆目改觀	當時悲觀	今日歡喜	群魔潛跡	諸天降臨
開祖餘德	機山遺蹤	晨鐘暮鼓	禪風再振	山門鎮靜	至祝無疆
千秋萬古	々々千秋	富岳雪白	笛河水清		

明治四十四年二月十一日

再住妙心現惠林筵川謹誌

又鎌倉圓覺寺前管長釋洪岳宗演禪師は去年の秋の中ば頃遙に來錫せられ偈を爲りて曰く

碧雲搖曳罩新堂 劫後重看輪奐光

同倚欄干一談二昔日 卅年山遠水還長 宗演師去る十四年洪川和尚に侍して登山の事あり故に句及之

寺門の風致は幸にも災火の傷を被らず。今尙兩袖櫻。兩班杉。臥龍松。橫月梅。惠山水。笛川流。心池月。士峰雪。松間板橋。林抄浮圖。等昔ながらの風趣依然たり是を惠山の十勝と稱し開山夢窓國師の名る所也。

暫く筆を改めて其の風致を語らん乎先づ惣門雜華世界之額面あり是より入る下乗の制札諸惡莫作衆善奉行の碣あり右に老松左に古梅阿叫の如くに對立す櫻桃道を交み錦紺藍地の間を歩むこと數十間赤門此の門は鎌倉時代の建築にして兩度の災を免れ現に特別保護建造物也あり乾徳山の額を掲ぐ一直道山門に達する左右に双沼あり廻らすに花木珍草を以てし老松古檜茂りて園を成す流泉滾々北より來りて此に注ぐ西北に兩袖の櫻あり數百の星霜を経て枝幹最も雄大にして高く山門を蓋ひ年々歳々陽春三月爛熳たる花は紅の火焰の輝にも似て樹下天正壬午亡諸大和尚の塔と刻する古碑苔上無心の落花點々たるあり人をして轉た今昔の感に堪へざらしむ相面じて東の方老杉擱空の下快川國師火定の碑は其の昔を語り讀むもの誰乎腸を斷ち襟を正さゞらんや山門を入れば前庭廣濶四株の剉松森に翠枝を延べて春風秋雨に

吟下千代の櫻と壽を争ふに似たり千代の櫻樹は夢窓國師の親ら栽へ給ひし所歳を閱み
 する茲に六百餘年幹の大さ五圍に餘り世に珍らしき枝垂れ櫻なり卅八年の大火に樹の
 半腹より焼け折れしも亦芽を發し今は能く枝葉茂りて年々花の開く昔に不レ異實に千
 代の名に不レ反も不思議也枯花寶殿舊開山塔を本尊釋迦文佛作者不詳天正の兵火を燒く人室方丈
 改造する也又禪定閣とも稱す蓋し小松宮殿下禪定閣の三大字を賜
 治四十二年之新築工費金三萬餘圓九間又は禪定閣とも稱す蓋し小松宮殿下禪定閣の三大字を賜
 間に十三間總建坪數百十七坪餘也

禪定閣後に假山水あり是ぞ開山夢窓國師之禪餘自築さし所深樹北面を蓋ふて奇石怪岩
 參差鋪張出入廻合して布置頗る妙趣を極む池水最も清冽なるは笛吹川の上流を此に引
 き來りて兩派をなし小瀑となりて池に入る東に瑟瑟として琴鳴るを琴の瀑と云ひ西に
 撃々として鼓和するを鼓の瀑と云ふ龜鶴千秋の松風に吟すれば黒緋の鯉魚濯々たる鵝
 鴨若石青叢の間に游泳するあり本堂庫厨の間別に一小池あり噴水常に珠を飛ばし銀を

亂るは國師之所鑿にして心字之池と名く彼の享保年中本州八景の和歌に外山中納言
 光顯公が惠林晚鐘と詠せられしは此の小池也歌に曰く

静かなるゆふべの鐘の聲きゝて

見れば心の池もにこらす

近き明治壬寅歲夏の初の頃維新の元勳東久世通禧伯入峽惠林寺に駕を枉げられ投宿の
 ことあり時に詩を賦して曰く

來宿ニ惠林寺一 禪堂月色清 水鮮洗ニ蘆慮一 終夜夢魂清

彼の甲陽軍鑑にも記す所の靈殿に安置せる信玄公の眞像は公未ニ下世一時洛の佛工康
 清を召して對面に彫刻せしむるに其貌與不動明王相肖たるを以て螺髮結跏趺坐し劍索
 を執らしめ頭髮を焼て著色とす宛然たる不動明王也遂に金伽羅誓多伽の二童子を造り
 左右に侍立せしむ但し肉付明王と只胸臂に長毫あるを殊なりと爲すのみ輪王寺宮公猷
 法親王殿下より武田不動尊の額字を賜ふ天正壬午の兵燹にも本尊釋迦拈花像と俱に免

れ今次も亦無事なることを得たり今に到り毎年回の忌辰には法會を修す國中有縁の寺院
院諷經拈香す香花客相集るもの甚だ多し物徂徠會て入峽玄公の尊像を拜禮したる時の
賦あり

悉道機山肖ニ不動ニ 誰知不動似ニ機山ニ

英雄千古玩レ人處 鐵甲十重忿怒顔

曾て黒田清綱大人登山參拜一首の和歌あり

さかまさし川中島のあた浪を

せきとめたるも君あればころ

亦素軒居士野村靖子入甲登山の砌の賦に曰く

故國遺風在 土人稱ニ館公ニ 山河形勝壯

兵馬霸圖空 社鼠終成禍 家豚忽謬功

低回古城下 落日吊ニ英雄ニ

靈屋に所安吉保の像は法橋淨慶と云ふ者刻せり享保九年和州郡山得替に依り龍華山
永慶寺より當寺へ改葬遷置する所なり

寺後信玄公の石塔あり武田信實荻原常陸同豊前大村伊賀尾畑景憲等の石塔相列し保山
の石碑も亦此の側にあり松浦肥前守源鎮信は深く機山公の英風武德を欽慕せし人也
遺願髪を惠林寺に送り玄公墓畔に埋め必ず一碑を建よと切望す卒後依て其の如くす故
に今尚一種雅致に富む異風の碑は即ち其れ也公の遠孫伯爵松浦詮氏爲に登山展墓す時
に一首詠歌あり曰く

かねの音水のひらきもすみわたり

たつねしやまの甲斐のふる寺

當寺所藏著明之什寶は

一夢窓國師書二軸 一は一行六字のもの也 一は六言四句のもの也

一夢窓國師肖像一軸周芳曇の筆也

一快川國師書一幀送行の序と七言絶句を書す

一信玄公書牘三章 一四郎勝頼書牘一章

一信玄公寺領定書一章

一信玄公寺領寄進狀一章

一惠林寺領檢地帳二冊 稱青表紙

一信玄公佩刀來國長刀一口

一同左文字之佩刀一口

一原大隅守大身鎗遠孫敬則寄進

一信玄公軍旗二旒一は孫子之旗一は諏訪明神

一信玄公眞筆百人一首一冊

一古法眼元信筆虎畫金屏風一双徳川家康公寄進の品

一敕許甲斐八景和歌卷物一卷

一羅漢畫柳里恭筆二軸

一小松宮彰仁王筆禪定閣之額

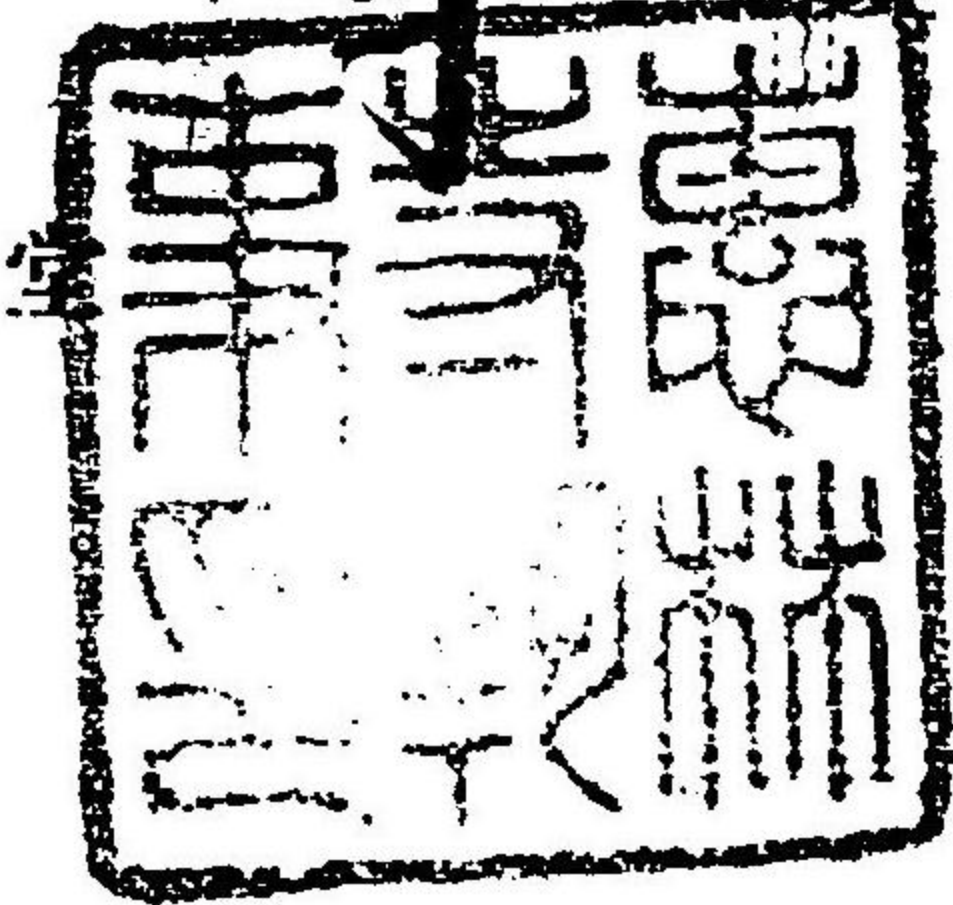
此の外珍什奇寶枚舉に違あらず今茲に略之焉

明治四十五年五月上浣

明治四十五年七月廿五日印刷
明治四十五年七月三十日發行

兼業編輯人

武井明



發行所 甲斐 惠林寺
山梨縣東八代郡石和町佛陀寺寓

〔賣價金貳拾錢〕

山梨縣甲府市百石町三百八十番地

印刷人 山岡英夫

山梨縣甲府市百石町三百八十番地

印刷所 山岡印刷所

D-4

清涼館
ホテル

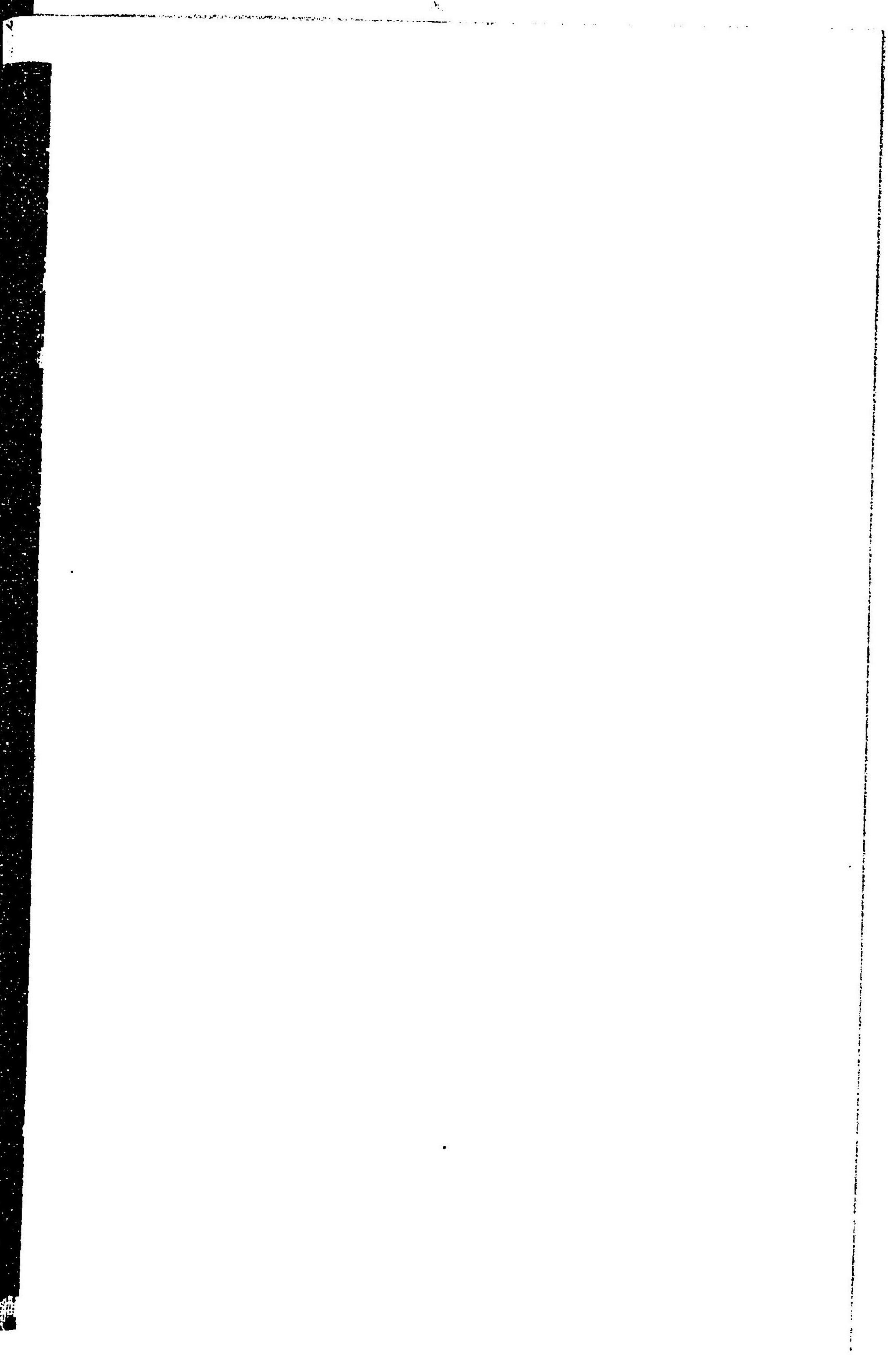
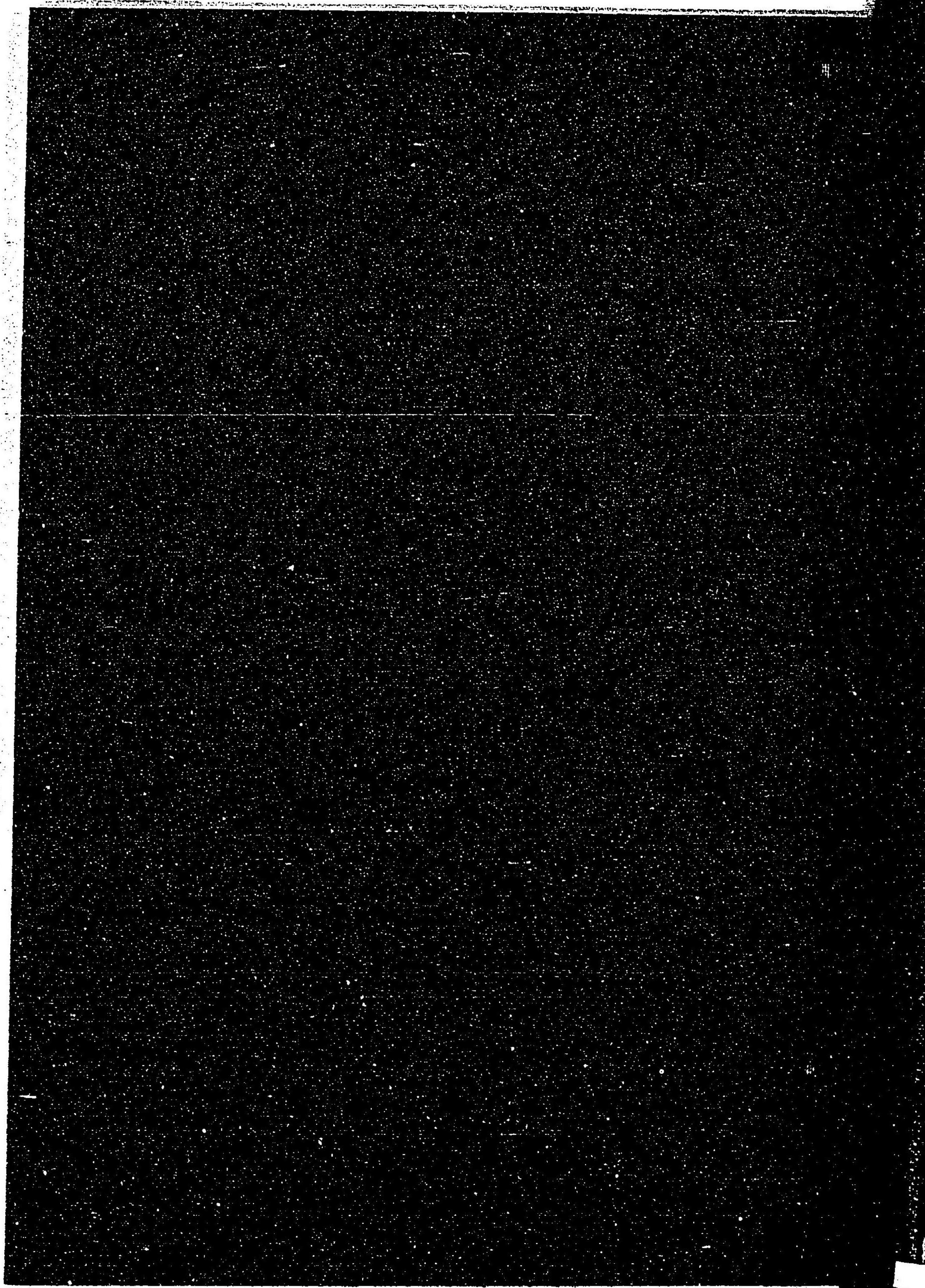
惠林寺參詣

客ノ便宜上

門前ニテ

營業

館主 土屋主計



7
6

再建
紀念 惠林寺略史

国立国会図書館

019363-000-1

特47-896

惠林寺略史

武井 明堂/編

M45.7

ABG-0054



